子ども観の社会史的考察に関する基礎研究
―日中子ども観の比較考察に向けてのアプローチ―

Basic Research for the Social History Study of the View of Children : Approach for Comparative Consideration of Children's Views in Japan and China

湯山 トミ子*
Tomiko Yuyama

Abstract

The social history study the view of children, which was born in Western Europe and has been developed mainly in Western Europe, is currently developing toward research from a global perspective. However, many Asian studies are conducted by country, and linguistic barriers are added, and the results are not fully reflected in global studies. This paper attempts a comparative study between Japan and China using painting materials, based on the issues of social history study of the view of children in Asia, which is required to develop from country to area studies and world studies. In the discussion, I based on China, which has a great influence on the formation of the view of children in East Asia and is advancing the arrangement of painting materials, and placed Japan, which has achieved its own development under the influence of China. This paper is a preliminary study that explores analytical perspectives for conducting comparative studies between Japan and China. In the future, if this can be developed into full-scale research and further expanded to comparative research that includes South Korea and Vietnam, it will become the basis of study the view of children in the Confucian cultural sphere, which is important for the formation of study of the view of children in the Asian region. I hope that this paper will be a step toward the development of social history study of the view of children in the Asian region, which requires global progress.

はじめに
Ⅰ．子ども観の社会史研究とアジア
Ⅱ．中国絵画に描かれた「子ども」に見る子ども観の展開
Ⅲ．絵画資料による日中子ども観の比較考察の視点構築をめぐって
おわりに

* 東京都立大学人文科学研究科 Tokyo Metropolitan University Graduate School of Humanities
E-mail: t-yuyama@tmu.ac.jp

はじめに

欧米に生まれ、欧米の先行研究を基礎に展開されてきた子ども観の社会史研究は、近年、世界を視野に入れたグローバルな研究課題に向かって発展している。しかし、欧米での研究成果が世界的な影響性、波及性をもちえたのに対し、アジア地域の研究は、国別の固有性を掘り起こす貴重な成果を生みながら、グローバルな研究展開という点ではなお課題を残している。その主な理由として、言語障壁により研究成果が国際的に共有されにくいこと、国別研究から地域研究への拡充が十分進展していないこと等が挙げられる。本稿は、こうした研究動向を踏まえ、アジアを対象とする子ども観の社会史研究について、国別研究から地域レベルへの発展を目指す一歩として、絵画資料による日中の比較を試みた。具体的には、アジア地域、特に東アジアの子ども観の形成に重要な役割を果たした儒教文化の源たる中国を基盤に、その影響下で独自の子ども観を生み出した日本を配した。絵画資料による分析は、文字資料では読み解きにくい社会的観念を視覚的に示せる利点から、子ども観の先行研究において広く用いられ、国別研究から地域研究への展開も支えてきた。本稿は、日中比較のための分析視点を探ることを目的とする予備考察であるが、今後、本格的研究に発展させ、さらに韓国、ベトナムを加え、アジア地域の研究に欠かせない儒教文化圏の考察基礎を築きたいと考えている。本稿が世界的な進展を求められるアジア地域の子ども観の社会史研究の一端となれば幸いである。

Ⅰ．子ども観の社会史研究とアジア

1．子ども観の社会史研究の展開、アジア、日中の研究の位置づけ

子ども観についての研究は、フランスの歴史家アナール派のフイリップ・アリエス『L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime』（1960）によって拓かれた。「子ども」の観念が16 ～ 17世紀における近代の家族形態の出現とともに誕生したとするアリエスの主張は、人口統計や図像資料等を手がかりに、子どもの服装や遊び等、従来の文字による歴史資料とは異なる多様な視点により、近代以降「子ども」に対する観念がそれ以前の「小さな大人」から大人とは異なる存在としての観念に変化したことを提起した。「子どもの発見」と称される衝撃的な提起は、後にアリエス以前、アリエス以後と区分されるメルクマールとなり、アリエス理論の欠陥も含めて、賛否をめぐる論議が長きにわたり続いた。その衝撃は、世界各地の子どもと家族研究、さらには近代世界をめぐる広範な学術領域に広く波及し、それぞれの領域の研究の進化、発展を生み出した。特に、従来当たり前と思われてきた社会的観念が、普遍的に固定して静的に存在するものではなく、社会と時代によって形成される可変的、動的なものであることを示したこと、文字資料に拠らず、図像資料を用いた考察対象の視覚化は、その後の人文、社会科学の研究方法に大きな影響をもたらした。

1960年代に遡るアリエスの子ども研究の成果と学術視点は、日本の子ども観の社会史研究にも大きな影響を生み出した。特に、原著より20年後に刊行された訳書『〈子供〉の誕生：アンシァンレジウム期の子どもと家族生活』（杉山光信・美恵子訳1980）によるところは大きい。初期は、日本発信の欧米圏の子どもや描かれた子どもの表象について適用する研究が多く見られたが[1]、時

[1] 西欧社会の子ども観の社会史研究を専題とする代表的な著作に、宮沢康人『社会史のなかの子ども―アリエス以後の〈家族と学校の近代〉』1988 新曜社、北本正章『子ども観の社会史：近代イギリスの共同体・家族・子ども』1993 新曜社等がある。

を経て、斬新な視点、考察方法が子ども、家族以外の領域、多分野に広く波及し、大きな関心を呼んだ。本稿が考察範囲とする中国では、1990年代以降、消長が見られるものの、「子どもの発見」は子ども観の社会史研究の基本事項として認知され、今日に至っている[2]。では、世界の研究において日本、中国の研究はどのように位置づけられているのだろうか？

子ども観の社会史的研究は、上記のように、フランスの心性史、社会史研究から発信され、その後も欧米中心に発展し、西欧については、質量ともに豊富な研究成果が蓄積され、現在はグローバルな研究に向かっている。しかし、グローバルを目指しつつ、現時点では、非西欧地域の研究成果との連係は必ずしも十分でない。例えば、ルネサンス以後の子ども観の社会史研究を俯瞰する成果として注目されるヒュー・カニンガム『Children and Childhood in Western Society Since 1500』（1995、2005邦訳2013）も欧米発信の欧米を対象とする研究成果であり、アジアは考察対象に含まれていない。ただアジアの側もアジアを考察対象とする研究成果を世界に向けて十分発信できているわけではない。アジア自身も国別中心の考察成果をアジア地域の考察に拡充し、グローバルな研究との連係に向けて自己発信する努力が求められている。

こうした研究状況の下、日本においても新たな動きが生まれつつある。例えば、村地稔三らによる『子ども観のグローバルヒストリ―』（2018）は、7か国を対象とした14本（日本を対象とするもの3編、中国について1篇）を収めている。それぞれは地域、時代の異なる多様性をもつものの世界史的位置づけ、歴史的展開に根ざす子ども観としての総合的な考察、分析成果まで展開できているわけではない。こうした状況を補うのが北本正章による序章「子ども観のグローバル・ヒストリーの研究動向」で、アリエス以後の流れを踏まえつつ、最新の子ども観研究の世界的な学術成果を紹介している。ただこれによっても子ども観研究の展開が欧米中心であり、アジアを対象とする研究の取り込みが必ずしも十分でないことがわかる[3]。同じく北本正章の監訳による『世界子ども学大辞典』（2016）がある。子どもに関する研究の総合的な研究ガイドであるポーラ・S. ファス主編による三巻本『Encyclopedia of Children and Childhood in History and Society』（2003）を一冊に編集した訳書である。445項目20カテゴリーの構成により、広範囲の領域にわたり大量の記述、資料紹介がある。特に、日本における子ども学の進展を意図した巻末付録「子ども学の基礎資料」は、日本未紹介の資料も含み、原書とは異なる選定を加えて編集された大変な労作であり、グローバルな子ども学の研究成果を日本に発信する意義は大きい。ただ本篇「中国の子ども」の項目本文に紹介された研究成果は英文二編のみであり、参考文献リストも英文のものとなっている。アジアの側からの成果が言語的に非常に限定された範囲で収録されていることが読み取れる[4]。

以上のように、西欧世界に誕生した子ども観の社会史研究は、アリエス以降60 年を経た今もなお西欧中心の展開という制約の中にある。こうした現状を踏まえて、今後どのように非西欧地域の成果を世界に向けて発信し、グローバルな研究と成果を共有していくのか、そこに非西欧地

---

[2] 外国の文化、思想の導入は改革開放等、社会政治状況の影響が大きい。アリエス『L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime』は、菲力浦·阿利埃斯著 沈坚・朱晓罕訳『儿童的世纪：旧制度下的儿童和家庭生活』2013 北京 北京大学出版社がある。

[3] 同序論訳注16北本正章『子ども観と教育の歴史図像学』（新曜社）は、中世･近代ヨーロッパの図像資料･絵画を用いて、アリエス「子供の誕生」以降の子ども観の変遷を辿る子ども学研究理論の集大成として注目されるが、刊行延期（2020.11）により本稿執筆時点では未見である。

[4] 「中国の子ども」の項目の本文に挙げられた英文資料（Ann Elizabeth Barrott Wicks『Children in Chinese Art』2002 University of Hawai'i Press、Kinney, Anne Behnke. ed『Chinese Views of Childhood』1995 Honolulu University of Hawai'i）は、2編とも希少性を評価するものの学術的な分析についての踏み込んだ記述はなく、参考文献16本もすべて英文の研究成果である。またこの項目に挿入された蘇漢臣の『秋庭戯嬰図』（本稿図10）を「秋の宮廷中庭で遊ぶ子どもたち」と解説する（英文の誤記による訳）等の誤認も見られる（訳書：806）。

域の研究役割と課題があるといえよう。

２．図像資料を用いた子ども観研究と日中を対象とする研究の位置づけ

アリエスが使用した図像資料等、文字以外の媒体による歴史研究は、その後、子ども観研究の基本資料として使用され、研究の展開を促進した。代表的な成果には、古代から現代までの図像資料を対象に子どもの形象、イメージを考察したアニタ・ショルシュ『Images of Childhood: An Illustrated Social History』（1979邦訳1992）、エリカ・ラングシュア『Imagning Childhood』（2006邦訳2008）等がある。子どもの肖像画の多い西欧では、子どもの肖像画のみを集めた大部の絵画集も複数刊行されており、家族の肖像とともに資料整備が進んでいる[5]。日本でもブリューゲル等、欧米の絵画を対象とする研究成果があり、世界的にも高く評価されている[6]。さらに家族、母子、家庭をめぐるグローバルな考察と成果の発信により注目されるのが、中村俊春編『絵画と私的世界の表象』（2012、英訳2014）である。子どもの肖像をめぐるオランダの美術資料の分析、唐子絵をめぐる近世日本の研究、日本統治時期の台湾における日中の画家の手による子ども像を比較考察した論考等が収録されている[7]。こうした先行研究の上に、今、アジア地域全体を統合的に考察する子ども観の社会史研究の進展が求められている。今後、国別を対象とする研究成果を踏まえ、それらを統合的な考察、研究に発展させていくことが、必要かつ重要な課題になるものと考える。

本稿の考察対象である中国の子どもについては、伝統的な教育、文学、思想領域で、文字による言説の蓄積がある。また、対象が20世紀に限定されるが中国青少年研究中心主編『百年中国児童』（2000）には、中国における子どもをめぐる多様な情報が収録されており、資料ソースとして貴重である[8]。ただ子ども観の社会史研究を専題とする詳細な通史的「子ども観史」はこれまでのところ未見である。

子どもを描いた図像資料については、唐代に源をなし、宋代に隆盛を見る子どもを専題とする嬰戯図についての関心が高く、新中国成立翌年の1950年より2000年代までに7冊ほどの画集、書籍が刊行されている[9]。90年代に刊行された台湾故宮博物院による同院収蔵絵画を集めた『嬰戯圖』（1990）、絵画だけでなく陶器、織物等子どもを題材とする工芸品も多数収録した李飛編『吉祥百子』（2007）は資料性が高い。さらに、中国美術史における子どもを題材とする絵画の唯一の通史として、特記すべきものに畏冬『中国古代兒童提材绘画』（1988）がある。印刷が1980年末であるため美術資料としては不鮮明であるが、西欧発信の子ども学研究の専門書、中国の子ども観と題する論考でも取り上げられることのない貴重な先行研究である。書名に古代とあるが、アヘン戦争以前を古代、以後を近代とする中国固有の歴史区分によるもので、同書の範囲

---

5 参考例として、Jan Baptist Bedaux, Rudi Ekkart『Pride and Joy: Children's Portraits in the Netherlands, 1500-1700』2001 NY、Harry N. Abrams・Mirjam Neumeisteed『The Changing Face of Childhood: British Children's Portraits and Their Influence in Europe』2007 Merrell Pub Ltd、Juliet Heslewood『Child: Portraits by 40 Great Artists』2013 Frances Lincoln等、多くの画集、子どもの肖像をめぐる専門書がある。

6 森洋子『子どもとカップルの美術史：中世から18世紀へ』2002 NHK出版、『ブリューゲルの“子供の遊戯”：遊びの図像学』1989 未来社等 ブリューゲルの「子供の遊戯」に対する精緻な分析を含め、子どもを照射する一連の研究考察、著述がある。

7 同書は、美術に反映された家族、母子、家庭についての考察を主題とし、西洋と日本の近世美術、アジア（中国・台湾）の近現代美術の諸作品を取り上げている（江戸期の家族観分析も見られる）。

8 児童文学方面の関連文献に徐兰君,安德鲁・琼斯主编『儿童的发现：现代中国文学及文化中的儿童问题』博雅・文学论丛 2011 北京大学出版社がある。

9 ①50年代：王博敏・夏与参『古代绘画的儿童画选集』1957天津美术出版社、陳鸝编『嬰戏图与货郎图』1958 人民美术出版社、②80年代：畏冬『中国古代儿童题材绘画』1989 紫禁城出版社、③90年代：國立故宮博物院編輯委員會『嬰戯圖』1990 國立故宮博物院、④2000年代：注4Ann Elizabeth Barrott Wicks、李飞编『吉祥百子』2007 西冷印社、薄松年『中国娃娃：喜庆欢乐的嬰戏图』2009 上海辞书出版社。

は文字通りの古代から清朝までを含んでいる。著者は風俗画の研究過程で、子どもの題材に関心をもち、その歴史的展開を跡付けたという[10]。子どもをめぐる中国の絵画史として唯一の先駆的成果であり、かつその後もこれに迫るものがない点で、中国における子どもを題材とする絵画資料として極めて重要である。なお、中国の絵画に描かれた子どもは、子どもを画題として特化した嬰戯図以外の絵画領域、風俗画にも見い出される。それらは、子どものみに焦点を当てた絵画以上に、子どもの社会的存在を示す点で資料性が高く、子ども観の社会史研究資料として重要である。ただ、これらは子どもを描いた絵画に分類されないため、嬰戯図はじめ子どもをテーマとする画集には収録されにくい。風俗画を集めた画集や故宮博物院絵画資料集等、大部の絵画集の中から丹念に一つずつ拾い出していく必要がある。次節では、筆者の発見による絵画も組み入れて取り上げる。

日本における絵画資料を用いた先駆的研究には、絵巻物を歴史資料に導入した黒田日出男『〔絵巻〕子どもの登場 中世社会の子ども像』（1985）[11]、地獄図、『餓鬼草紙』、『農業図絵』（土居又三郎 1717）等により、日本の中世における子どもの存在を読み解こうとした斎藤研一『子どもの中世史』（初版2003、復刊2012）がある。さらに、独自の分析方法と考察成果で注目されるのが河野通明「常民研本「四季耕作子供遊戯図巻」の成立」（1999）である。河野は、描かれた子どもの細かな形象よりも図像構成の意図そのものを読み解くことにより、絵巻のもつ意図と作者の子ども観の抽出に成功しており、子ども観研究の考察事例として興味深く、参照すべき点が少くない[12]。

子ども期の考察には、絵画資料のほか、服飾、通過儀礼等、産育等の習俗に基づく民俗学的アプローチがある。実態として子どもの在り方に基づく子ども観、特に、子ども期についての観念を考察するための実証的な研究成果が蓄積されているが、留意しておかねばならない問題も残されている。柳田国男の言説に始まると見なされ、その後、日本の子ども観の基本的観点として、民俗学から絵画資料による研究まで広範囲に取り入れられ、前提として扱われてきた「七つ前は神のうち」の言説である。いわば日本の子ども期についての観点を示す基本認識と見なされてきたこの言説が、具体的事例に基づかず、実証的な根拠をもたぬまま、流布してきたことが柴田純『日本幼児史：子どもへのまなざし』（2008）により論証されている[13]。このことは、ただ一言説に対する論証に留まらず、子ども観研究は自明視される事項についてもなお緻密に、実証的に分析する必要があることを示している。

日本における子どもの社会的存在について、民俗学的研究の成果が蓄積され、子どもの形象を映し出す絵画資料が入手しやすい点で注目されるのが江戸期である。子ども、母子像、子どもの遊び等、大量の図像をもつ江戸期の浮世絵は、複数の画集が刊行され、資料整備が進んでおり、中国の絵画に描かれた子ども像、母子像との異相について、対照考察できる貴重な資料源とな

---

[10] 2016年11月、筆者と畏冬の面談による（於北京）

[11] 黒田日出男『姿としぐさの中世史：絵図と絵巻の風景から』1986 平凡社、2002増補版 平凡社ライブラリー、日本における絵画資料による初期の考察史は附章「図像の歴史学」に詳しい。

[12] 考察対象「四季耕作子供遊戯図巻」（水賓和継 1703 元禄16年）は、子どもの遊びを交えながら一年間の水田耕作の情景を描いた絹絵耕作図巻で、河野は子弟教育の道徳テキストとしての特性と子ども期を大人への通過期と見なす子ども観を見い出している。図像は所蔵する神奈川大学日本常民研究所「絵画資料デジタルコレクション」により公開されている（URL：jominken.kanagawa-u.ac.jp/books/ezoom/（2020.11）。

[13] 柳田国男、宮田登、太田素子、沢山美果子など、民俗学、教育学、文学などの幅広い領域で、論拠、実証がないままに前提視され、多くの日本の子どもに関する言説の根拠となってきたことが論証されている。著者柴田純は、七歳を子ども期の区切りと見なすことと「七つ前は神の内」の観点との違いも指摘している。同書、プロローグ参照。

る[14]。本稿第Ⅲ章で、中国の年画[15]と浮世絵に映し出された子どもの形象、子ども観について比較考察を行う。

Ⅱ．中国絵画に描かれた「子ども」に見る子ども観の展開

1．子どもを題材とする絵画の発展と展開

前章に挙げた畏冬『中国古代兒童提材絵画』は、中国における子ども観の考察に貴重な美術史料である。ただ子ども観の社会史研究には、美術書とは異なる視点による資料の収集、分析が必要となる。例えば、子どもを描くことを専題にし、子どもの姿をフォーカスした嬰戯図とは異なる一般的な風俗画に描き込まれた子どもの姿も子ども観研究に重要な資料となる。一方、子ども観研究からの視点、発見は、美術史における子どもを題材とする絵画の発掘、再考にも寄与する。本稿では、畏冬（1988）の解説、紹介資料を手がかりとしつつ、子ども観研究の観点から筆者自身が発掘した絵画資料、解釈を追加して考察見解を提示する。

畏冬は、子どもを題材とする絵画の歴史2000年を、伝統的な中国美術史の時期区分に即して、1. 萌芽、誕生期：戦国―南北朝、2. 発展・成熟期：唐・五代、3. 隆盛期：両宋、4.芸術的な衰退期：明、清、として解釈している。美術史の視点から、子どもを描いた絵画がもっとも発展した宋代以降は、芸術的発展が見られず、全体的に宋代風絵画の域に留まることから芸術的な衰退、没落期と評されているが、子ども観研究の観点からは、子どもを描いた絵画が普及し、一般的となった時代と見なせるため、筆者は隆盛期の宋代以降は、子ども描いた絵画の普及期ととらえる。畏冬が芸術的発展からは衰退期と見なす明清期にも名作と評される作品、子ども像として興味深い作品は少なくない。本稿の主題は、子どもを題材とする絵画史を網羅的に概説することではなく、中国の絵画資料を基盤に、日中比較研究のための有効な視点、方法について考察することにある。紙幅の関係からも子ども観の考察に手がかりとなるもの、必要なものを絞り込み、その要件を端的に示す代表的な作品例を幾つか選び、記述することにする。子どもを描いた絵画を網羅的に紹介すること、並びに同一主題でも画家の個性により異なる絵画世界の芸術的多様さに踏み込んでの考察は、本稿の範囲としない。また紹介の要を認めながら画像の鮮明度から本稿に図像を提示できないものも少なくないことも予めお断りしておきたい[16]。

---

[14] 子どもと母子に重点を置いた浮世絵は、収録画像が複数の刊行物で重複するが、解説文献は同一ではない。収録図像の多いものとして、①江戸子ども文化研究会編『浮世絵のなかの子どもたち』1993くもん出版、②『浮世絵に見る江戸の子どもたち』2000 小学館、詳細な事項解説が得られる③小林忠監修 中城正堯編『こども遊び大辞典』2014 東京堂出版、展覧会図録であるが内容量が多い④『江戸へようこそ 浮世絵に描かれた子どもたち』展覧会図録2014 千葉市美術館、専題による特集型冊子に⑤小林忠監修『母子絵百景：よみがえる江戸の子育て』公文浮世絵コレクション 2007 河出書房新社、⑥小林忠監修 中城正堯編『江戸子ども百景』公文浮世絵コレクション 2008 河出書房新社、ほかに展覧会図録が複数ある。くもん子ども浮世絵ミュージアム：https://www.kumon-ukiyoe.jpでは、公文教育研究会収蔵作品の内、約1,800作品（約2,135点）を公開している。また東京農工大学付属科学博物館蚕織錦絵アーカイブ:https://archives.tuat-museum.orgでは、蚕織浮世絵400点余りのコレクションが公開されている。そのほか、子ども、母子に特化せず、生活情景を題材とする浮世絵に描かれた子どもの考察資料には、国書刊行会編『目でみる江戸時代:江戸風俗画集成』Ⅰ Ⅱ（全2巻）1985 東京 国書刊行会が生活風景の中の子どもの形象を考察するための基礎資料として有用である。

[15] 年画資料は多様な題材をもち、時代と生産地等の相違による画像の特色がある。清代以降大量に出版され、収録刊行物、参考資料は多い。日本で出版された吉祥年画を集めた中国年画集には、潘元石、池上正治他『吉祥祈願の年画（中国伝統版画集成）』1997 平河出版社、樋田 直人『中国の年画―祈りと吉祥の版画』あじあブックス 2001 大修館書店、三山陵編著『フルカラーで楽しむ中国年画の小宇宙：庶民の伝統藝術』2013 勉誠出版等がある。

[16] 絹地に描かれた図像は、色彩的に白黒画像では鮮明に提示できないものが多い。また本稿は紙幅の関係

なお、畏冬によれば、子どもの題材は、歴史的には早くから描かれ、定番的な題材の一つであったが、美術史の上では、長い間、それ自体が独立した題材として認識され、単独の項目と見なされることはなかった[17]。その理由として、畏冬は題材として広範囲の絵画に描かれるものであったがゆえに、特化して対象化されにくかったからであろうとしている[18]。子ども観は、生命観、宗教、倫理等の共同体原理と社会経済の発展と深く関わる。洋の東西を問わず、経済発展により、庶民層が増大した時代は、多くの人々が生活、人生を重んじ、子どもへの関心をもつ余裕が生まれる。中国の唐宋期も経済的繁栄を背景に、子どもの教育、医療等が発達し、社会的に子どもの存在を尊重する気風、価値観が増し、子どもを専題とする絵画芸術嬰戯図が生まれ、隆盛を見るに至った。いうなれば、唐宋以前は、子どもは特別に対象化されず、生活風景の一部、或いは大人社会のルールたる倫理道徳の説話の構成要素として描き込まれる存在であった。しかし、唐宋以後は、子どもの存在に対する社会的関心が高まり、意識的に描く対象へと変わっていった。そこに、子どもが描かれていた時代と意識的に子どもを描く時代の大きな変化、子ども観の変化を読み取ることができる。以下、筆者によるこの区分法に基づき、子どもを描いた絵画について、時代背景とジャンル、画題から考察することにする。

２．絵画のジャンル、題材から見た子どもを描いた図像資料

子どもを描いた絵画資料を代表するものに嬰戯図がある。しかし、嬰戯図に何を含めるかは、統一されているわけではない。畏冬は、子どもの生活の三点「遊ぶ」、「学習」、「働く」に呼応する中国の伝統的な絵画領域として、嬰戯図に、放牧図、貨郎図（行商人を題材とし、多くが買い手である女性と子どもを描く）を基本三類型とし、これに子どもを題材とするが特殊な形態であると見なす木版画娃娃図、節句祝等の行事に用いられる時令図（年中行事、節気、生活を題材とする風俗画）を加えて考察している[19]。先に挙げた台湾故宮博物院による『嬰戯圖』は、貨郎図を収録するが、放牧図、娃娃図は収録しない。本稿は、こうした相違を踏まえた上で、子ども観を考察するための対象として、家庭、社会生活一般に見られる子ども、寓意としての子ども像の観点を加え、本節で（1）「子どもが描かれていた時代（唐･宋以前）」、(2)「子どもを描いた時代（唐宋以後）」を概観し、次節で放牧図、貨郎図、娃娃図、時令図、さらに子どもを題材とする絵画類に分類されない「その他」を取り上げて、中国の子ども観を考察する視点と特徴について、代表的な作品を例示しながら概述する。中国美術史の発展に関する解釈、絵画資料は、「その他」と一部を除き、畏冬の前掲書に基づく。時代的にはそれぞれの領域の基礎が生まれた初期に着目し、唐宋を中心に明清期も加えた。

(1) 子どもが描かれていた時代（唐宋以前）

古代社会（春秋、戦国時代）における豊穣祈願等の呪術的役割、墳墓に故人の生涯、生活を描く等の目的の下では、子どもは構成要素として描かかれており、子どもそのものを描くことは目的ではなかった。例えば、豊穣、産育のシンボルとして墳墓の壁画に描かかれた子ども、農業、

と考察対象の絞り込みにより、アスターナ等の遺跡資料、永楽壁画、仏画、工芸品等に描かれた子どもの図像、明清以後の図像資料は、考察範囲に含めず、取り上げない。稿を改めて論ずることにしたい。

[17] 清代の张之铃『画家品类就要』「画仕女论」の後に「嬰児」という項目が付け加えられ、数十字分の紹介が残されている。畏冬『中国古代兒童提材絵画』1988 紫禁城出版社：1

[18] 絵画芸術の隆盛期である宋代は、子どもに対する関心が深まり、子どもを大事に思う心性、芸術品の商品化により、児童を題材とする絵画が流行し、民間、宮廷を問わず重要なジャンルとなった。当時、流行した言葉に「一人、二嬰、三山、四花、五獣、六神佛」（黄宾虹『虹庐画谈』）があり、嬰児は人に次いで二番目で人気絵画題材であった。畏冬前掲書：27

[19] 畏冬前掲書：3

狩猟等の生活情景の中に働く子ども（図1、図2）等の図像が残されている。母と子の姿を描いた母子像といえば、キリスト教の聖母子像、近代家族（友愛家族）の典型的な表現である母性愛に溢れ、抱き合う母子像、日本の浮世絵の母子像等が想起されるが、古代においては、母が子どものみに関心を示し、抱き合うという姿は、洋の東西を問わずあまり見られない。畏冬は、漢代画像石の中から希少な母子の形象を見い出し、自ら母子図と名付け、紹介している[20]。図3は、二人の母がそれぞれ子どもを抱きながら、子どもに関心を向けておらず、足元には母の注意を引こうとして、母を見上げる女児の姿が描かれている。図4でも子ども2人のうち1人は、関心を示していない母に注意を向けてもらいたいかのように働きかけている。古代の母子像の典型といえよう。儒教が国教となった漢代になると、儒教道徳を語るために描かれた説話中に子どもの形象が見い出せる。鮮明な図像の提供が難しいため図像は例示できないが、宮中生活を描いた顧愷之（344頃-405頃）『女史箴図』（唐代模写、絹絵巻）には、父親であろう帝王を前に、三人の子どもが笑う、むずかる、興味を示す等、感情表現豊かに描かれている。絵画の目的は子どもを描くこと自体になく、宮廷における嬪妃に対する教戒にある。しかし、無名の職人が描いた壁画（図3、図4）に対し、後世に名立たる顧愷之の筆は、単純な動作、外形の輪郭に留まらず、心理、性格を描き出し、子ども像としての造形に大きな進展が見られる。

図1　後漢　牛耕点播（陝西省綏徳県）
大人が耕す後ろで種まきをする子ども

図2　後漢　酒肆画像磚（四川彭県）
酒甕を担いだ大人の前で楽し気に戯れる子ども

図3　後漢　母子図（山東省両城山）
左の母は1人、右の母は2人、両者の間に少女が1人、背後に1人、5人の子どもが描かれている。

図4　後漢　母子図（陝西省綏徳県）
賀家溝磚梁漢墓門左豎框

[20] 畏冬前掲書：9

(2) 子どもを描いた時代（唐宋以降）

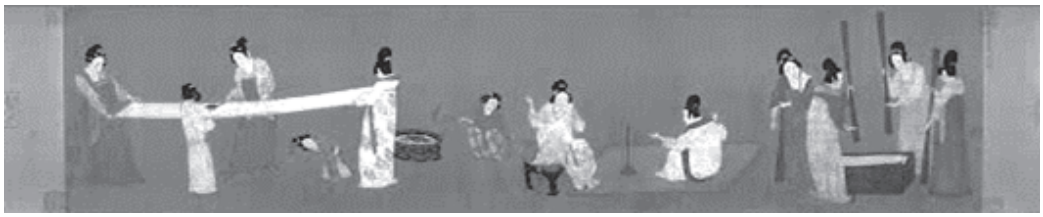
唐代以降は、子どもの存在と子どもの形象を求める社会的背景、描き手の技能、意識にも大きな変化が生まれる。美術史の面から見れば、晋代の宮廷画家によって先駆的に示された子どもの形象は、唐代に引き継がれ、宮廷画壇の発展、文人職業画家の登場等により、精度の高い芸術作品が多数生み出されている。畏冬は、子どもを題材とする絵画が唐代に発展する要因として、①科挙童子科の誕生（『文献通考』巻35「選挙考」8「童科」）、②子ども専門の医療の始まり（「小児科」〔少小科〕の誕生『新唐書・百官志』）、③子どもの社会的行事、活動の記録（『宮廷行事記録』、『旧唐書・音楽志』）、④文学創作、特に詩歌等における子どもの形象の増加、表現力の進歩等を挙げ、子どもの社会生活が広がり、漢晋以来の封建的礼教、宗教的範囲を脱し、現実生活の多様な側面に即して、子どもを描く豊富な題材に取材できたため、子どもに対する関心が深まり、その存在を注視、重視する兆しが見え出したのだと述べている[21]。

続く宋代も経済の発展を背景に商人層が台頭し、都市文化が繁栄した。増大する庶民層は、自己の生活、感情、理想、美観を満たす対象を求め、繁栄する都市文化を享受した。経済的な豊かさ、文化、教養の進歩、子どもの医療、教育の普及、発達により、子どもの生活環境は多様化し、絵画の題材も広がった。また子どもを駆災降福をもたらす吉祥のシンボルと見なす思考、気風が強まり、絵画のみならず生活用具、工芸品（陶器、焼き物）等にも子どもが描かれ、人気を博した。芸術的には、卓抜した技量をもつ画家が多数輩出し、絵画芸術の商品化による促進の下、子どもを描く技術が普及し、発展した。特に、宋代以降、宮廷画家、在野の職業画家、文人画家が競いあい、模写、模倣、類似絵画を大量に生産し、個性ある作品も数多く生み出された[22]。

3．唐宋以降の美術史に見る子どもを題材とした絵画

(1) 唐代宮廷画家による仕女図に見る子ども

女性と子どもを題材とする中国宮廷絵画仕女図の初期の著名な画家に張萱（713-755）がいる。畏冬は、張萱が子どもを題材とする絵画技法の発展に重要な貢献をしたと評価する記述があることに着目し、絵画の題材として「子ども」が重視されるに至ったと読み解いている[23]。『搗練図巻』（図5 宋代の模写）には、子どもらしい体形、柔らかく、しなやかな形象、愛らしい顔の造形、表情等の写実性に加え、好奇心に満ちた子どもらしい心理、動きが見られ、富貴華麗、豪奢な風格を示す唐代宮廷画風の代表的な子ども形象が描き出されている。



唐　張萱『搗練図巻』（全図）
図5-1

[21] 畏冬前掲書：15-16
[22] 畏冬前掲書：24-33
[23] 『历代名画记』5、『宣和画谱』47と記載された作品は大部分散逸している。畏冬前掲書：16

図5-2　拡大図

図6　唐　周昉『麟趾図』（部分）

図7　周文矩『宮中図巻』「開歩」

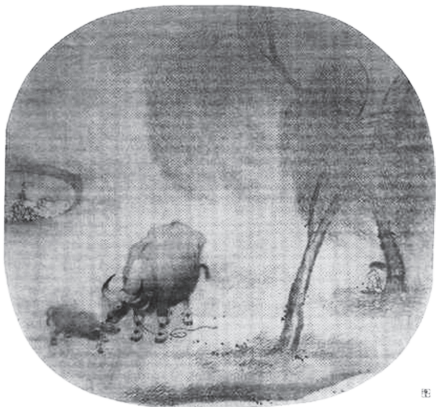
張萱に学び、その画風を継いだとされる周昉（766-785）の『麟趾図』（図6）は、宮廷における男児の生活情景を描き出した華麗で優美な作品で、子どものあどけなさ、ふっくらとした肢体の形象と描写、みやびやかな雰囲気の中で入浴、遊ぶ姿等が描かれている。同じく張萱派の周文矩（五代南唐、生没年不詳）の『宮中図巻』（宋代の模写）には「婦人、小児数八十」との記述が残されているが、現在確認されている子どもは十数人である。3人の官女に囲まれたよちよち歩きの男児の興奮と恐れを示す表情が鮮明な「開歩」（図7）、2人の女児が2匹の犬を脅してからかう、いたずら心を描いた「戯犬」等、生き生きとした子どもの姿は、子どもの生活に対する関心、観察力、表現力あっての表現といえる。

(2) 放牧図（唐・宋）

唐代の宮廷絵画のきらびやかな「富貴気象」画風に対して、自然の情景を題材とする画風「田家風俗」に、農村の子どもの生活を描いた作品がある。富裕な環境に生きる子どもと相反する貧しい子どもの厳しい生活環境と労働、労働の合間に遊びに興じる姿、さらに寂しさ、孤独感、愛情への渇望等、子どもの内面をも表現した興味深い作品が多数見られる。南宋の祁序（生没年不詳）『江山放牧図』には、牛を競争させる子ども、牛の背で笛を吹いたり、将棋したり、喧嘩をしたりする11人の牧童と15頭の牛の多様な様子がふんだんに描かれている。牛の頭によじ登る牧童、牛を動かそうと格闘する牧童と牛のせめぎあい等、牛と牧童の感情の交錯、厳しい寒さの中で働く子どもの姿と親子牛の愛情を描いた李唐（1066-1150）は、子どもに関心を示す興味深い作品を多数残している。

牧童と牛との交流に着目した情景を得意とする先駆的な画家に、牛馬の描写にすぐれた文人画家であり高官（右大臣）でもあった韓滉（723-789）がいる。その筆によるとされる『豊稔図』（北

京故宮博物院所蔵）は、二人の牧童が川の中ではしゃぎ、喜び、帽子が流れているのも気づかない姿と、驚いて子どもを見る母牛と乳を飲む子牛の姿を通して、農村風景の素朴さの中に複雑な感情表現を描き込んでいる。孤愁を漂わす牧童と親子間の睦ましい愛情を象徴する母牛と子牛を描くことは、有名、無名を問わず放牧図の定番構図である（図8）。閻次平（南宋期1162-1189頃に活動、画院画家）の『秋野牧牛図』（図9 泉屋博古館蔵、国宝）では、子牛の体をなめる母牛と首を伸ばして横たわり、草を食むもう一頭の牛、少し離れた木の根元にしゃがみ、母牛と子牛の睦まじい姿を見つめる一人の頭を、兄であろうか、もう一人の牧童が虱をとるようなしぐさで覆っている。所蔵館の解説でさえ、のどかな農村風景を描いた作品と解釈しているが、幼くして働く貧しい牧童と愛情への渇望を映し出す親子牛との組み合わせ、さらに思いやりの情愛溢れる構図を加えた作品構成は、芸術的完成度の高さとともに子ども観の考察からも注目される。子どもを描き入れた放牧図は、農村風景を好む上層階層、宮廷画壇の嗜好も踏まえた上、より多面的、多角的な分析が必要となる。特に、西欧絵画には見られない牧童の弧愁と親子牛の愛情を対比する構図は儒教文化の影響も含めて、極めて興味深い課題、考察対象といえる。



宋　作者不詳　『放牛図』　図8-1　親子牛と牧童

図8-2　孤愁（部分拡大）

宋 閻次平『秋野牧牛図』
図9-1　軸　全図

図9-2　牧童兄弟と親子牛
（部分拡大）

図9-3　牧童兄弟
（部分拡大）

(3) 嬰戯図（唐から宋へ）

古代絵画において、大人より小さい人物描写にすぎなかった素朴な子どもの形象は、書き手の技術的成熟、画材（壁画、紙、絹）、絵画の形状（巻物、扇面、団扇、冊子等）の多様化により、子どもらしい体形、表情から次第に、一人一人の性格、情景による違いを映し出すきめ細やかな表現へと深化し、やがて子どもの個性そのものを描くことを求めるレベルに至った。これにより子どもを表現する中国固有の絵画芸術、絵画世界の高度の熟成がもたらされた。その頂点となったのが宋代に隆盛をみる嬰戯図である。宋代を代表する画家蘇漢臣（北宋末・南宋初の画院画家、生没年不詳）は、幅広い題材を描きながら子どもを描いた作品が実に7割を占め、都市の子どもを描いた作品により後代の作家にも大きな影響をもたらした。なかでも富裕な商人層の子女の姿を描いた『秋庭戯嬰図』（図10）、『冬日戯嬰図』（図11部分）は、名画中の名画と讃えられる最高傑作である。幼くあどけない姉と弟の愛らしい姿、周囲に描きこまれた吉祥を示す動植物（蜂、椿、梅、西湖石等）は、嬰戯図の典型的な構図と高度の芸術性を表現している。子どものもつしなやかさ、柔らかさを写実的に描き出す筆致から、実在する子女の肖像画にも見えるが、中国では子どもの肖像画を残す慣習はなく、モデルはいたとしても西洋絵画のような肖像画ではない（図12）。また、描かれている子どもは、貴族的なきらびやかさを示しているが、貴族、宮廷の子女ではなく、富裕な商人層の子女であり、庶民層らしい親しみ深い表情、風情をもつ幸福の象徴を託された子どもの形象である。儒教を基本とする中国では、子どもの存在そのものが吉祥を示し、多ければ多いほど幸福度を高める。そのため、「多子多孫」、「子孫繁栄」の図柄は、幸福の表象であり、子どもが戯れる姿は、平安と繁栄の象徴を表現する。たくさんの男児が遊び戯れる百子図系列はもとより、さまざまな遊びに興じる子どものみを特化して描いた嬰戯図は人気の画題であった。なお、中国では、伝統的に「子」は男児を示し、子どもとは男児を示すが、蘇漢臣の百子図は、男児に混じえて女児を描く、大勢の幸せそうな子どもの中に孤独な子どもの姿を描き入れる等の特色をもつ点でも注目される。描かれる女児は図10、図11同様、姉風の姿が多く、母性の役割が投影されており、ジェンダー分析による考察課題を提示している。

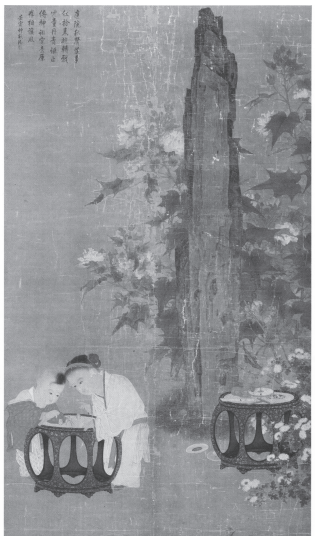


図10-1　『秋庭戯嬰図』

上図10-2　『秋庭戯嬰図』拡大
下図11　『冬日戯嬰図』部分

図12　ゴヤ『ドン・マヌエル・オソーリオ・マンリケ・デ・スニガ』1787-1788頃　6歳

宋　蘇漢臣『嬰戯図』（部分拡大）

図13-1　ビードロを吹く男児　　図13-2　コマを回す男児

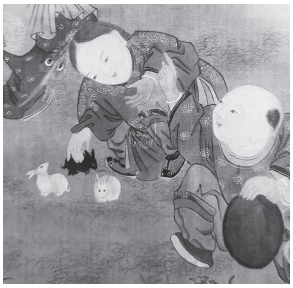


図14　元　作者不詳
『秋影嬰戯図』（部分拡大）

図15　明　陳洪綬『嬰戯拝佛図』（部分）
ユーモアあふれる構図

図16　清　閔貞『童子奕棋図』
囲碁に興じる子ども、目隠しされる子ども

嬰戯図には、いろいろな子どもの遊び（凧あげ、将棋、かくれんぼ、水浴、拝佛等 ）、生活情景が示されているが、描き手により描かれる子どもの表情、絵画としての味わい、特色は異なり、時代的な変化も見られる。宮廷画家、職業画家に対し、文人画家は写実的な画風だけでなく、写意画法（対象の本質、描き手の内面、精神を投影する技法）による嬰戯図を描き、独自の子どもの形象を生み出している（図16）。なお、人々に好まれた嬰戯図は、子どもの形象を精緻にし、個性（表情、仕草）も描き分ける技能的な発展を促したが、子どものみをフォーカスし、大人と隔絶された時空間に子どもを取り込むことにより、実社会で子どもがもつ周囲との関わり、家族環境、人間関係、社会性等、社会的存在としての要素を切り落とすことにもなった。そのため、写実的な形象であるにもかかわらず、実態としての子どもではなく、子どもに対する象徴的な観念を示す特徴が生み出されていることを読み取っておく必要がある。

（4）時令図

伝統行事、節句を祝う絵画に時令図があり、子どもを中心に描くものもある。正月、年末等を迎えるときの生活情景を描く時令図には、一般的な中国絵画の流れに属する写実的なものと寓意性に富むものが見られる。写実的なものには、爆竹で遊ぶ子どもや爆竹を怖がる子どもの姿等が描き込まれ、穏やかな家庭生活の情景を通して新たな年の平安と幸福を祈る大人の願いが映し出されている。寓意性に富むものは、吉祥への祈念を込めた象徴的な画風で、嬰戯図に描かれた子ども形象のリアルさを残しながら、絵画の構成は寓意に富み、現実にはありえない

象徴的な構図で描かれている。筆者が「吉祥の擬人化」と考える子ども像の源流、基盤として、年画の前身と位置づけることができる（図17、図18）。

図17　宋　作者不詳『百子嬉春図』

図18　宋　蘇漢臣『開泰図』
満開の紅梅と羊に乗る男児

(5) 貨郎図（宋代～）

宋代の経済発展により生まれたのが、行商人を描いた貨郎図である。明清時代には、様式化したきらびやかな宮廷画風による装飾的、様式的絵画に転じていくが、宋代には、宮廷画家の手によりながら素朴な農村を回る行商人と、これを取り囲む子ども、母親等を描いており、騒いだり、はしゃいだり、争いあったり、譲りあったり、満足したり、失望したり、好奇心にかられたり、といった生き生きとした子どもの様子がふんだんに盛り込まれている。蘇漢臣の貨郎図（図19）は、宮廷風の華やかさで描かれながら慈愛や素朴な表情を見せる行商人の形象、小さな兄弟喧嘩、好奇心に満ちた子どものほほえましい姿等で高い芸術性と親しみやすさが評価されている。

図19　宋　蘇漢臣『貨郎図』

宋　李崇『貨郎図』
図20-1　貨郎に群がる母と子どもたち、一人淋し気な貧しいお使いの少女

図20-2　母に甘える子どもたち、奪い合う兄弟、少女とその背後の犬の親子（部分拡大）

きらびやかな蘇漢臣に対して、家具職人から身を起こし3代の宮廷に使えた宮廷画家李崇（455-525）、農村を訪れた行商人を取り囲んだり、駆けつける母親と子どもの賑わいとともに、その賑わいからはずれてぽつんと一人寂しげにたたずみ、指を加える少女の姿を描き込んでいる（図20）。下層階級から身を起こした李崇の作品は、卓抜した精緻な筆さばきとともに、農村の生活風景、貧しい民衆への眼差し、貧しい少女の内面をもとらえる独自の視点が際立っている。また、先の放牧図で言及した李唐の『灸艾図』には、灸をすえる男を取り囲む村人に混じり、大人の背からこわごわ覗きこむ子どもの姿が描かれている[24]。子どもに目を向ける絵師、画家の個性が子どもを題材とする絵画の芸術性と内面的な深みを生み出している点に注目したい。

(6) その他（風俗画）

子どもの形象は、子どもを主題とする絵画以外の広範囲の風俗画に広く見い出される。子どものみを特化して描く嬰戯図は、子どもを子どもだけの世界に取り込むことにより、子どもを社会から切り離した存在に転じる。これに対して子どもに特化しない画題をもつ一般的な風俗画の中に子どもと家族、他者との繋がり、社会との関わり等、社会的存在としての子どもの姿が見い出され、子ども観の理解に重要な手掛かりが得られる。宋代の名画『清明上河図』（張擇端 生没年不詳 北宋 翰林待詔 図21）は、水墨で開封と近郊の情景を描いた5m余りの絵巻物で、中に1643人の人物、208匹の動物、二十余りの車と船、三十余棟の家屋、店先が描き込まれている。その中に、歩き始めた子どもを知人に自慢げに見せる父親（21-1）、父親に肩車された子や抱かれた子（21-2）、話しに興じる大人の足元の子ども（21-3）、親に欲しい物をおねだりする子、薬屋で子どもを見せる母親等、さまざまな子どもや親子の姿、情景が描き出されている。

---

[24] 農村を訪れる貨郎は、薬の販売や施術も行っていた。灸をすえる人物が貨郎とは限らないが、農村地帯で医療が行われる場面を見物する子どもの姿を描いた絵画資料は、西洋絵画にも多く見られ、東西比較考察の手がかりとなる。

宋　張擇端『清明上河図』（部分拡大）
図21-1　歩き始めた子どもを見せる父親
指差しながら見物に加わっている子ども（左脇）

図21-2　買い物する親子
抱かれる子と父親に肩車される男児

図21-3　談笑する大人の間の子ども

南宋の劉松年（生没年不詳）の『春社図』（図22）には、刃物を振りかざされた父親と子ども、慌てて母親を呼び出してきた子（図22-1）、酔っ払って騒ぐ大人たちの足元で拍子をとって浮かれる幼児（図22-2）、盲人の手を引く子どもと、祭りの宵を迎えた村の風景の中に描かれた子どもの姿が目を引く。また、明の職業画家周臣（1460–1535）の『漁邨図』の狭い船中には、母親に食べさせてもらっている子ども、破格の笑顔で母親から赤子を受け取る父親、魚籠に手を突っ込み探る子ども等が生き生きと描き込まれている（図23-1-4）。周臣には、明代の悲惨な流民を描いた『流民図」があり、痩せこけた赤子を抱く老婆の姿等、強烈な画題も描いている。図24（1－3）は、周臣の教えを受けた元漆職人で、同じく職業画家であった仇英（1497-1552頃）の作とされる『耕織図』で、大人たちとともに暮らす子どもの姿（男児・女児）が日常生活のさりげない情景として描き込まれている。耕織図は、農民の労苦を為政者に説く鑑戒と勧農の目的をもち、宋代以降、多くの絵師、画家によって描かれ、版本も複数系統ある。図25は、清の康熙帝が宮廷画家焦乗貞に描かせ、全図に御製の詩を付して刊行したもので、後代に大きな影響力を与えた。西欧遠近法の技能を活かした焦は、随所に子どもの姿を描き入れ、耕作と蚕織の全過程46図（耕23、織23）の三分の二以上に子どもの姿を見い出せる。子どもの仕草、動きの巧みな表現とともに、農村生活における子どもの役割、親子関係等、暮らしぶりが映し出されている点で耕織図の資料性は高い[25]。以上からもうかがえるように、子どもに特化しない風俗画

[25] 農作業と蚕織労働を描いた図像自体は古代より見られるが、宋代に県知事の楼璹（臨安）が高宗に、水田耕作と蚕織労働の一連の過程を描いて献上した後、系列的な題材として発展した。楼璹の『耕織圖』

の中に、生活風景を通して描かれた多数の子どもの姿があり、それらの描き手には、李崇、仇英等、貧しい階層の出身者が少なくない。庶民の生活とその中に生きる子どもを見つめる画家自身のまなざしあっての子どもの形象化といえよう。

宋　劉松年『春社図』（部分拡大）

図22-1　喧嘩と子ども　　図22-2　酔っ払いと浮かれる子ども

母親を呼びに行った子どもと謝る父親の腰を引く子ども

明　周臣　『漁邨図』（部分拡大）

図23-1

二艘の船上に複数の家族・母子・父子・子どもが描かれている。巻物全体では浜辺で魚を売る母の傍らで遊ぶ子どもの姿等も見られ、子ども（ほとんど男児）、家族が複数描かれている。

（1237）は、日本にも伝搬し（狩野永納の明代宋宗魯版の版刻 1676、他に宋梁櫂本）、屏風絵、襖絵として独自の発展を遂げ、浮世絵（錦絵）の題材にもなった。仇英『耕織圖』（台北故宮博物院蔵12図）と『佩文斎耕織圖』、『康熙帝御製耕織図』（46図 1689 1712）は、子どもの姿が多いのが特徴で、類似する構図をもつ。楼璹版にも授乳、姑と母子、働く子ども等の姿が描かれてはいるが、農耕蚕織作業に重点が置かれており、子どもの姿は農作・蚕織43幅全体では10余り、子どもそのものを描くことへの関心は強くない。姑と母子、子ども、老人を描くことは、平安な生活を象徴する意味をもつ形象として耕織図に好まれる題材である。耕織図に関する先行研究は中国はもとより、日本でも伝搬系譜と日本化の特徴、農耕蚕織技術、芸術的展開をめぐる研究成果が多い。描かれた人物数や配置等から分析は、河野通明に見られるが、母子、父子、子ども観についての本格的研究、日中比較研究は、今後積極的に拓かれるべき課題といえよう。なお、仇英版『耕織図』については、構図分析により清代焦乗貞版作成後の作であるとの見解が提出されている（趙雅書1976、渡部武2000）。

図23-2
子ども（男児）に食事を与える母

図23-3
両手を広げ、笑顔を見せる父親と父親のほうに手を伸ばす男児、背後にも父親に抱かれる赤子

図23-4
魚籠の中を探る男児

明　仇英『耕織図』

図24-1　5（部分拡大）
籾摺り作業する大人の傍らで塀に上り遊ぶ子

図24-2　9（部分拡大）
塀越しに臨家と話す母と子

図24-3　10　べそをかきなが歩く母子と、家の中で母と祖母（嫁と姑）が仲睦まじく糸継ぎをする様子を外から覗いて見ている女児。母、子、姑三代を一軒の家に描き、家庭円満を示す。

清　焦秉貞『御製耕織圖』 1696

図25-1　耕15　収刈（部分拡大）
駄々をこねる子と働く年長の子どもたち

図25-2　耕20　簸揚（部分拡大）
母の作業を傍らで眺めている男児、背後に授乳する母子

図25-3　耕23　祭神
拝礼する大人の傍らで真似ようと眺める男児と女主人らしき母子

(7) 年画

祝祭、魔よけ、年画の起源は漢代に始まるとされるが、子どもの形象に吉祥の寓意を盛りこむ図案は、唐代に遡り、宋代に基本的な形態が整い、子どものみを主題化した嬰戯図の隆盛を経て、子どもを吉祥のシンボルとして象徴的に描く、寓意に満ちた節句祝いの時令図へと発展した。さらに、明清時代に、木版と印刷技術の発展により、子どもを題材としつつ、肉筆絵画とは画風も内容も目的も異なる中国独自の木版画である娃娃画が生まれる。特に、清代の多色刷の普及、雍正、乾隆時代における年画生産地の全国的な拡大により大量な制作が可能となり、普及が進んだ。年画制作の拠点に、北方年画を代表する天津（楊柳青）と南方年画を代表する蘇州（桃花塢）があり、後者は日本の浮世絵にも影響を与えている。二つの拠点の作風は異なるが、人間生活の理想と願望を表す寓意性に富んだ子どもの形象が共通する特徴である。

年画の主題は、①「多子多孫」（子ども、孫の誕生を祝う。ex「連生貴子」（図26）、「貴子有余」、「麒麟送子」、「観音送子」、「天賜麟児」、「五子愛蓮（連）」、「得子図」、「百子図」）、②子孫の幸福（科挙合格、仕官栄達、平安和睦を求める。ex「五子奪魁」、「五子登科」、「五子日升」、「五子奪梅」、「子孫合歓」、「子孫平安」）、③一家の幸福（各種の新年の祝賀、魔よけ、吉祥祈願を求める。ex「頑童楽有余」、「万福攸同（童）」、「五福自天来」、「平安大有祝」、「吉祥有余」、「連年有余」、「翹盼福音」、「金玉満堂」、「四季平安」、「桂序升平」、「三多（福、禄、寿）」（図27）、「鬧元宵」、「童子弾三弦」）等がある。この内、②は内容が単純で、子どもの生活に関わるものの、子どもは象徴的形象である。③は内容多岐にわたり、一部が子どもの形象に関わるが、他の題材も多い。通俗的でわかりやすいこと、吉祥を制作原則とする年画は、子どもに関する物語と伝説により、人々の理想と願望を表現するものが多い。

図26 『連生貴子』天津楊柳青年画
蓮の花（“連”と蓮は同音）、笙（“生”は同音）、石榴（多子）の吉祥モチーフ

図27 『福壽三多』
石榴（多子）、壽桃（長寿）、佛手柑（多福）が一緒にあることが三福、吉祥を示す。

表現の特色は、素朴、明朗、活発、陽気、愉快、親しみ、喜びに富む等を基調として、装飾性が強い表現を重んじ、子どもの形象は、慶事、吉祥を示す象徴性を不可欠の要素とするため、写実的であることを求めず、描かれる子どもの形象は、形式的で、誇張した顔立ち、きらびやかで多彩な表現により作られ、眉目麗しい、細い眉、アーモンド形の目、ふくよかな顔立ち、体つきで、色彩は紅、緑、黒、等の原色を多用し、鮮烈、鮮やかである。

作品の構成は、先に挙げた子孫繁栄、科挙合格、仕官栄達、富貴繁栄等を求めるストリー性をもつ題材「連生貴子」（男児と蓮の花）、「子孫合和」（男児と蓮の花、ねむの花）、「貴子有余」（男児と魚）、「頑童楽有余」（山水の景色、蓮の花をもち、金魚、鯉、鯰に乗る男児）等、現実にありえない構図で寓意性に富んで作画される。「吉祥の擬人化」といいうる子どもの形象であり、特に男児中心の形象が多い。嬰戯図等、伝統的な子どもを題材とする絵画は、児童の生活に基づき、これを表現することを重んじる写実性を追求し、児童の個性、感情、気質を重んじ、これを表現することが好まれ、望まれた。これに対して、娃娃画は、子どもの形象により人間の願望と理想を象徴的に表現する抽象性に富み、あでやかな色彩と形式化、誇張化された子どもの形象を基本とするものである。それゆえに、畏冬は伝統的な絵画に対して特殊な形態として、娃娃画を区分したのである。

Ⅲ．絵画資料による日中子ども観の比較考察の視点構築をめぐって

以上の考察例が示すように中国絵画史において子どもの題材は、実に豊かな絵画世界を生み出し、子ども観考察に十分な基盤を提供している。しかし、この豊富な資料に対して、現在のところ、子どもを題材とする日本の絵画資料は、浮世絵等特定のジャンルを除けば、まとまった通史的概説、資料集等が十分に整えられているとはいえない。総合的な考察をするための準備を始めること自体が開拓的な研究課題となる。

そのため、本稿では、前章に述べた中国を基盤に、考察資料の整備が進み、異相性も明示的な浮世絵を対象に、日中子ども観の比較研究に向けて、どのようなアプローチが可能か、視点構築を探る基礎考察を試みる。年画、浮世絵は対象範囲が広いため、本稿ではまず描かれた子どもに着目した題材をもつ年画、子ども浮世絵、母子絵を基本範囲として考察する。

1．年画と浮世絵

中国の年画は、年越し、新年を祝うための節季祝を目的に制作される絵画であり、祝祭用として、幸福な未来の招来を託するため、明るくあでやかで、象徴的な寓意に満ちた題材を特徴とする。吉祥祈願を込めた題材は、多岐にわたるが、子孫繁栄、富貴繁栄、科挙合格、仕官栄達等、科挙、男児偏重を特色とする題材は、日本には直接的な影響を生み出さなかった。伝統的に浴嬰図と呼ばれる子どもを入浴させる情景等、仕女図、嬰戯図以来の画題では、基本的に子ども世話をする母の姿、世話を受ける子どもの姿そのものを描くことは目的ではなく、満ち足りた平安な家庭、幸福の情景の象徴として描かれている。そのため、写実的な筆致を用いず、母も子も寓意を込めた「吉祥の擬人化」による形象で描き出されている。

これに対して、浮世絵は、鑑賞用を主目的として制作されたため、鑑賞者の求めと社会的条件により、描かれる内容が変化している。子どもに関わるものは、①子どもを題材とし、子どもの姿、生活を描いたもの、②子どもに読み聞かせる物語、子どもが使う玩具類となるもの、③子どもと女性（母、姉等）を描いたものに大きく分けられる。①を子ども絵、③を母子絵とする呼び方も提唱されている。③は、母親と子どもの姿、母子関係を描くことを主題とし、子どもを慈しむ女性の姿、そして母親の性的な描写に力点を置くもの等が見られる。細やかな愛情で子どもの世話をする母親、やんちゃぶりを発揮する子ども等は、侍女を従えた富裕な仕女図系統の年画には見られない、生活色の濃厚な母子関係が表現されている。描かれる子どもは、男児ばかりを特化した構図が多く見られる中国の年画に対して、女児が多いのも特徴である。母と娘、女児と男児の組み合せも多く見られる。年画同様、女児がおとなしく姉風、男児が弟風でやんちゃ、活力ある腕白坊主に描かれるとともに、開放的でお茶面な女児の形象も見られ、ジェンダー観の相違が投影されている[26]。

2．子どもの活動（遊ぶ・学ぶ・働く）による考察方法

(1)「遊ぶ」

室町時代より日本に伝搬したとされる中国の子どもを描いた唐子絵は、日本画の狩野派の絵等に模倣作品が見られる。明代のきらびやかな百子図、嬰戯図が好まれ、唐子と呼ばれる中国習俗の子どもの姿のままの模写、同一、類似の題材による日本制作品や唐子の習俗を日本習俗の児童に置き換えた絵画大和唐も多数見られる。さらに、江戸時代に入ってから生まれる浮世絵の子どもを題材とする絵画への影響も大きい。子どもの遊ぶ姿のみを主題として展開された嬰戯図にならい、子どもの遊びのみを主題とした作品群「子ども絵」が多数見られる。遊びの種類には異なるものもあるが、子どものみを特化し、遊ぶ姿を主題とする構図、構成等、中国の嬰戯図との共通性が大きい。中国絵画による影響関係の跡付けも子ども観研究に有益な考察課題であるが、筆者は、子ども観比較考察のキーとして、絵画世界に描き出された子どもの存在、形象、及び子どもと大人の関係性を示す情景により生まれる特徴、固有性に注目している。

図28　清　焦乗貞『放凧筝』

[26] 子ども観の社会史研究の考察では、男女児童のジェンダー役割を読み解く分析要素として姉妹兄弟が注目される。姉と弟の組み合わせでは母性、兄と妹では弱き女性を守る男性役割が投影され、刷り込まれている。日中の相違、東西の相違、特色に注目したい。

図28は、清時代の嬰戯図で、男児のみで凧挙げが行われているが、日本の浮世絵（図29）は男児女児が混じりあい凧揚げをしている情景を描いている。また、子どもの遊びを博物誌風に描いた歌川広重（1797-1858）『風流おさなあそび』では男児女児は別だが、歌川芳虎（生没年不詳）『子ども遊びつくし』（1848-1853年頃 嘉永）は、男児女児の遊びを混在させ、区分けしていない。

図29　歌川国芳『江戸勝景中州より三つまたは永代橋をみる図　天保頃 1830-1844

日本の浮世絵は、一部の性的表現の濃厚な母子図で、意識的に男児を描くものもあるが、男児女児ともに描くものが多い。中国の絵画では、男児のみを血筋を継ぐとみなす儒教的子ども観（単系性）ゆえに、吉祥のシンボルとしての男児中心の画題で子どもを描くものが多い。特に、子孫繁栄、科挙合格を主題とする年画では、男児のみを描く「五子奪冠」等の画題が多い。血筋をよりも家の観念が支配的な日本の家族観、双系性の日本の特徴との相違が、年画と浮世絵の画題、図像内容に明快に反映されている。「子ども」への関心の高さと性別への関心により生み出される子ども観の相違は、日中子ども観の重要な分析視点である。子どもの遊びを特化した嬰戯図における性別の在り方、男児と女児の様相（腕白とお転婆ぶりの有無等）、表現に託されたジェンダー役割に着目した考察は、今後の重要な研究課題である。

(2)「学ぶ」

「学ぶ」の題材は、多様な活動情景として描かれる。なかでも集団で学ぶ学校風景は、大人の子どもに対する考え方を示す教育的な観点、学び手である子ども、教え手である大人の様子、行動等から子ども観を示す多様な情報が読み取れ、多面的、多角的な考察が可能である。以下、学校風景に着目した比較考察の一例を記す。

中国の村塾は農村、日本の寺子屋は都市と、学校の性格は異なるが、一人の教師が年齢の異なる子どもたちを教え、手が行きとどかず、まじめに学ぶ子ども、叱られる子ども等、ばらばらな行動をとる姿は、洋の東西を問わない近代化以前の学校の特徴である。

中国の村塾等学習塾の情景を描いた絵画は、子どもの教育が普及する宋代から見られる。なかでも興味深いものとして、子どもたちが教師の居眠りに乗じて、腕白ぶりを発揮して悪戯に興じる様子を描いた『村童闹学図』（図30-1、30-2）がある。まじめに学ぶ子ども（すべて男児）の姿も見られるが、まさに悪戯し放題である。同様に浮世絵にも子どもが教師をからかう、悪戯に興じる題材を描いた寺子屋風景（図31、図32）もある。やわらかな彩色と写意手法の特徴から図像を提示できないが、図35の悪戯と図37の叱責を併せもつ寺子屋風景（鍬形蕙斎『職人尽絵詞』巻3－8肉筆浮世絵絵巻）では、カリカチャライズした凄まじい形相の教師、お仕置きされ泣きじゃ

くる子、そのすきに乗じて墨を顔に塗りたくりふざける子、年少の子を強引に抑え込んで教えようとする兄貴分の男児等、自由奔放、活気にあふれた腕白坊主の姿が奔放な筆致で描き出されている。図33は、男女別に学ぶ寺子屋の女児の姿で、これも奔放でのびのびした表情が印象的である。こうした「学び」に描き出された子どもの自由奔放さ、悪戯ぶりは、大人から厭われず、むしろ喝采を招くものと見なされていたことを示す図像資料は多い。悪戯を主題にしたすごろく遊び等も見られる。真面目に学ぶ情景を描いたものもあるが、日中ともに子どもの腕白ぶりを厭う、禁じる戒めとして描いていない点が注目される。またこうした子どもの腕白ぶりには、権威、支配層に対する大人の批判性、風刺も読み取れる。『村童闘学図』の場合、教師は科挙試験の合格、栄達を求めて果たせない知識人であり、寺子屋は刀を差した武士階級である[27]。

同じ儒教文化圏の韓国でも同様の絵画の存在が予想されるが、現時点では、真面目に学ぶ情景以外は未見である。

子どもと学びの題材では、子どもの本性、性格をどうとらえるか、人間性の根源となる性善説、性悪説に根ざした教育観、原罪説による宗教観等の考え方による影響が大きい。本稿の課題を越えるため、直接考察対象には加えないが、15 ～ 16世紀のフランドル派の絵画は、プロティスタンティズムの原罪説により、子どもの遊びを放逸さの象徴とし、奔放な子どもの性情を否定的に捉えるため、学校風景も戒めの場として描かれている（図35、図36）。ロマン主義時代は子どもの本性に無垢、純真さを理想とみなす心性により子どもの形象、情景が変化し、革命期には支配層への批判性が積極的に盛り込まれる等、大人の観念の投影が如実に映し出されている。

宋　作者不詳『村童闘学図』仇英模写

図30-1　　図30-2（部分拡大）

居眠りする教師の帽子をとる子、教師の姿を真似する子、椅子を回して遊ぶ子、あかんべをする子、注意を奪われて見つめる子等、暴れまわる子どもたち（男児）の姿が描かれている。

[27] 武士階級の権威を風刺する作品例として、子どもの水鉄砲が武士の顔を直撃する情景を描いた歌川広蔭「江戸名所道化尽十一下谷御成道」安政6年等も見られる。

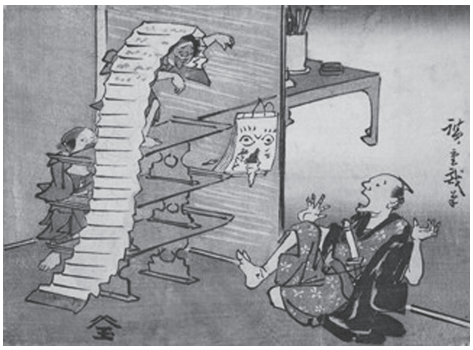
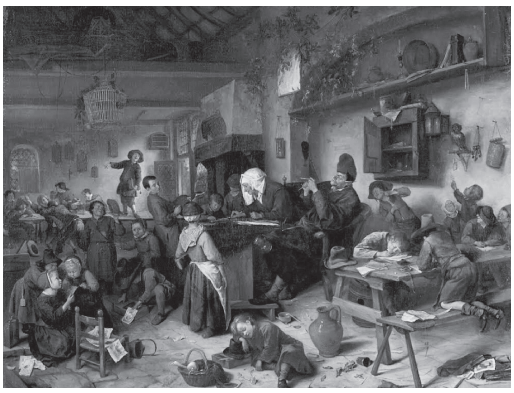


図31　歌川広重『寺子屋遊び』天保後期頃

図32　下河辺拾水『画本弄』安永9年 1779

図33　一寸子花里『文学ばんだいの宝　末の巻』
弘化3年頃 1846（女児）自由奔放な女児の姿

図34　歌川芳幾『江戸砂子供遊日本堤』
万延元年 1860



J・ステーン　図35　『少年・少女の学校』
1670年頃作

J・ステーン　図36　『村の学校』
1663-1665

図37　歌川広重『諸芸稽古図会』（一部）天保後期頃

（3）働く

働く子どもの絵を考えた場合、中国絵画で頻繁に目に留まるのは、山水画、人物画等の一般的な絵画に描かれる小姓、文人に仕える小姓の姿（侍童）である。描かれた子どもとして考察の対象となるが、膨大な量があり、子どもを描くことに特定の意図をもって描かれたものではないため、今後、新たに考察を進めるべき課題である。日本でも小姓、丁稚奉公、子守り等の児童労働があるが、本稿では、絵画題材として一定の研究蓄積があり、牧童を描いた放牧図に注目したい。

牧童を描いた放牧図でもっとも多いのは、子どもの労働に適した牛や羊の放牧を描いた図像で、特に江南の水牛を描いた放牛図が多い。日本では、子どもの農耕労働は、放牛よりも牛馬をひく運搬（馬子）が多い。子どもの農業労働の実態的な形象は、漢代の画像石（本稿図1参照）、日中の耕織図等にも見られる。先行研究では、斎藤研一（2003）が農書、農業絵図を用いて、日本の近世、中世の子どもの農業労働の考察を行っている。西洋絵画でも放牧を描いた風景画（牛以外、羊の放牧も多い）は多く、牧童に焦点を置いた人物画等も見られるが、中国の放牧図のように、牧童の存在を重要な構成要素として、その内面も映しだず独特の絵画世界を構築したものは見られない。中国の放牛図に描かれた子どもの姿は、ゆったりとした農村風景の中で、子どもらしい活気、やんちゃぶりを示すものから、厳しい冬の寒さ、風雨の中で、裸足で働く厳しい労働の姿を描いたものまで多数見られる。特に、母牛と子牛の睦まじさ、愛情表現と牧童の内面の孤独、弧愁とを対比する構図は、特筆すべき中国絵画ならではの特徴であり、日本への伝搬、影響、独自な発展を踏まえた考察が今後の課題となる。いずれにしても子ども観の考察分析にあたっては、実態としての働く子どもの存在と、大人が込めた感情表現、象徴的な表象としての両面からの考察が重要となる（図8、図9参照）

ショルシュ（1985）は、19世紀後半のアメリカで一時期子ども像を美化した絵画が流行した状況を紹介し、なぜこうした美化が求められ、人気を得たのかに目を向けるべきだと述べている[28]。図38は、美化された形象の一例である。疲れて眠りこけた少年の顔は、破れた上着に反して白くふっくらとして貧苦を感じさせず、美しく輝いている。美化された働く子どもは、明るい笑顔だけでなく、時に疲れや暗さを感じさせる表情、煙草を吸う、かけ事をする等の姿でも描かれているが、その顔立ちはほとんどが美しく輝き、穢れを感じさせる汚れは排除され、貧苦、労苦、病苦を感じさせない[29]。子ども像の美化は、働く子どもを対象にしながら、美しさ、好ましさ、

---

[28] アニタ・ショルシュ（1979 邦訳1992）図94解説

[29] ジョン・ジョージ・ブラウン（John George Brown 1831-1913）は、ストリートチルドレン、新聞配達、靴磨きの少年等、多様な子どもの姿を描き、商業的にも成功した人気画家である。19世紀のアメリカと

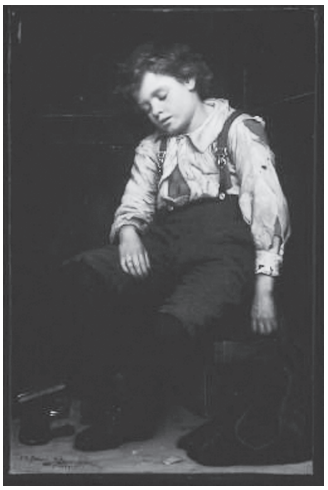


図38　ジョン・ジョージ・ブラウン『疲れきった靴磨きの少年』1881

愛らしさを描きこんで成立している。そこには、厳しい暮らしの中で、瞬間に輝く子どもの喜怒哀楽をとらえる画家のまなざし、貧困にもかかわらず生き続ける無垢、純粋、真摯な人間性を見出したい大人の情念、それを満たそうとする消費文化の動向、要求が浮かび上がる。吉祥を希求する嬰戯図、年画、明るい子ども像を基本とする江戸浮世絵には、働く子どもの悲哀さ、孤独、寂しさといった負のイメージをもつ形象はほとんど見られない。そこにも社会に生きる子どもの実態と大人の情念、理念による美化を読み取ることができる。働く子どもの考察には、侍童、牧童、従弟、丁稚、子守り等、都市から農山村、漁村まで広がり、さらに、孤児、捨て子、売られる子ども、遺棄された子どもまでを含めれば範囲は膨大であり、別の枠組が必要となろう。社会における子どもの実態についての基礎資料、貧困と過酷な労働にあえぐ悲惨な子どもの状況を批判し、救済を求める図像も含めて、子どもに投影される大人の情念、理念を読み解き、子ども観の社会史的考察を進めていく必要がある。

3．子ども像の形態的特徴に基づく考察

(1) 母子像の場合

近代以前、中国の伝統社会では、世代の相違を重んじる社会的慣習から、大人と子どもを一つ画面に描いた家族の肖像はなく､子どもの肖像画を残すこともなかった[30]。中国の子どもを描いた絵画の中で、子どもと大人の関係が描いた形象は、前章で取り上げた風俗画等に見られるが、それ以外では、女性と子どもをセットにした仕女図、吉祥年画に母子、家族の姿が描かれている。以下、日本の浮世絵と比較しやすく、西洋との対比もわかりやすい考察課題として母子像を取り上げておきたい。日本の浮世絵の分類では、子どもと母を描いているものを、特に、母子絵と呼ぶ流れができている。年画と浮世絵では、絵画作成の目的、描かれる対象の母子の階層にも開きがあり、それぞれに固有の特徴を見い出すことができる。例えば、図39から図41の年画は、生活感のない穏やか、たおやかな静止画的形象が強い。これに対して図42から図46の浮世絵に描かれた庶民の母子は、母も子も活力にあふれ、生命感、躍動感を感じさせる動的特徴が鮮明である（図39-46）。

母子絵における分析視点として注目されるのが、年画にはない浮世絵の大きな特徴たる性的表現である。母子絵に描き込まれた性的表現は、顕示的なものから暗示的なものまで多様である。

同様に英国18世紀ヴィクトリア時代には、貧困と児童労働の悲惨さを批判する実態としての子どもと子どもを美化する形象（『子ども学大辞典』ヴィクトリア時代の美術）がともに生み出されている。肖像画の伝統がある西欧絵画では、中国の放牧図、嬰戯図とは異なる子どもにフォーカスした人物画が展開されている。「働く」題材は、大人が抱く思想性、哲学的な観念、理念と、現実の社会における実態としての子どもの存在との乖離、異相を明快に浮かび上がらせる。近代以降を対象とする場合、豊富な写真資料との比較により子ども観の社会史研究分析を促進できる。

[30] 近代以降、特に中国では、都市の知識人、中上層では、急速に家族、子どもの写真が普及していく。伝統的時代における肖像画、子ども観の観念との異相が考察課題となる。

母親の肢体が露わなもの、乳房を露わにした授乳の姿等は、性的表現に直結する典型的なものと見なされやすいが、江戸期、庶民層の母親は、人前で授乳する習慣があったため、一概に性的表現ときめつけることはできないとの見方もある（沢山美果子『江戸の乳と子ども』2017）。ただ授乳する母子絵に登場する幼児は、明らかに男児と思わせるものが多く、授乳題材に女児がほとんど見られない点も見落とせない。そのため、浮世絵の購買者、鑑賞者である男性が画中の男児に託して絵画中の母親の性的表現を享受する効用があったとの指摘もある（北山修編『共視論』2005）[31]。授乳以外にも母親に対する性的表現と受け取れる母子絵は多々見られる。図43は、母親の肢体に露わな性的表現はなく、家庭の日常生活に見られる母子を健全に描いているかに見える。しかし、子どもは明らかに男児であり、座る母の股間と胸の内に足を入れる動作が描き込まれている。さらに浮世絵どうしだが、図45と図46を比べてみる。両者は、ともに乳房と男児を描き入れた授乳のモチーフを含むが、前者は働く母の授乳であり、母役割の女性形象に重点がある。これに対して、後者は母役割よりも女っぷりを上げたい女性の色香に力点をもつ女性形象の特徴が際立つ。こうした例からも読み取れるように、性的表現は多様な表現形態をもち、意図も単一ではない。性的表現か否か、一律に問う、或いは二者択一的に区分する視点は必ずしも有効ではあるまい。本来、絵画資料は、多様な意図と要素により構成される総合的な芸術表現であるだけに、そこに生み出される複合性、混合性を理解しておく必要がある。

中国では、農村、庶民を題材にもつ貨郎図、耕織図には授乳する母子の形象が見られるが、通常、上層階級の女性が人前で肌を見せることはない、布教のためであろう授乳する仕女風の母子を描いた銅版画がわずかに見られる。キリスト教圏の場合、15世紀から16世紀にかけて、授乳する聖母子像が制作された。神聖であるべき聖母の授乳は、浮世絵の表現とは逆に肉感的、性的表現を極力そぎ落とすための工夫がなされ、母子の表情も神聖、厳か、慈悲深さと多様であり、肉体的には不自然な表現も多々見られる。信仰の対象である母子像と日常的な母子の姿は直結できないが、両者の異相性を踏まえた上で、子ども観、母子関係、象徴的役割等、取り組むべき課題は多様であると考える[32]。西欧キリスト教圏では、歴史的、伝統的に聖母子が支配的な母子絵であるため、近代以前は肖像画、宗教画以外に日常的な母子像が描かれることはなかった。浮世絵の母子像に刺激、啓発を受けた女性画家メアリー・カサット（1844-1926）は、日常的生活における母子像を制作し、人気を博した。そこに母性愛、母子関係の虚構性も成立するが（馬淵明子『非対称の視線』1997）[33]、母子像は、グローバルな視点による子ども観の比較研究を進展させる画題として注目される。参考に浮世絵の授乳する母子絵（図47）と対照的な聖母子の画像例を挙げておく（図48）。

---

[31] 北山修編『共視論：母子像の心理学』2005：30。また、同書では、浮世絵の母子絵の特徴として、母子が互いよりも同じ方向を見つめる表現をとることが指摘されている。母子像の視点は、年画、浮世絵、東西の比較分析に興味深い考察課題となる。なお、本稿注14⑤中城正堯「浮世絵の母性を見る眼」2007：91-93も北山の母子共視論を取り上げて、浮世絵と母性を論じている。

[32] 聖母子の形象は、マリアとキリストの表情、仕草等が時代、地域、信仰のあり方により異なる。威厳、慈愛等、母子像のもつ形象的特徴は、多様な表現と日常的な母子像との異相、母性分析に重要な考察視点と資料を提供する。図48は同じ主題で多数の作品があり慈愛に満ちた聖母子も描かれている。授乳聖母の形象分析は、石井美樹子『聖母のルネサンス：マリアはどう描かれたのか』2004、授乳については沢山美果子（2017）に詳しい。聖母子の東洋化、中国での展開、日中の影響関係は、若桑みどり『聖母像の到来』2008 青土社で取り上げられている。授乳聖母については、日本化の事例分析はあるが、中国については、特に例示されていない。

[33] 馬淵明子はメアリー・カサット（Mary Stevenson Cassatt）、ベルト・モリゾ（Berthe Morisot 1841-1895）に見られる近代母子像の母性表現の虚構性を明快に読み解いている。

図39　清『大富貴亦壽孝』（対）
部分　女児1、男児3

図40　清『母子図』（対）
母と男児2

図41　清『漁婦』（対）
同音「漁」と「余」で富裕発財を示す。

歌川国貞『子宝遊』
図42　けんか　　図43　からくり人形
天保頃

図44　歌川国芳
『山海名産尽紀州鯨』
文政頃1818-1831

図45　五風亭貞虎（歌川貞虎）
『蚕家産業之図』文政（1800年代初期）
働く母の乳をほおばる男児とやきもちから思わず邪魔する兄

図46　歌川国貞
『時世百化鳥風車にみみずく』天保初期
女っぷりを上げたい母と乳房にぶら下がっても離さない男児

図47　喜多川歌麿『当世風俗通』
女房風　享和1801-1804

図48　ジェラール・デイヴィト（部分）
『エジプト逃避途上の休息』1512 - 1515

(2) 父子像、春画

本稿では、紙幅の関係もあり、父親を加えた親子絵を取上げていない。量的に母子絵ほどの絵画資料はないが、浮世絵の情景画には、子どもを肩車した父子の睦まじい姿が多々見られる。吉祥を願う年画の家族絵とは異なる生活の一コマとしての親子、父子の姿は、Ⅱ章で取り上げた風俗画（図21-23）等にも共通する。日本の生活風景を描いた風俗画、やまと絵の巻物に描かれた家族形象、子どもと親子、さらに子どもの性別も含めて、今後、丹念に掘り起こしていく必要がある。

なお、性的表現と子ども観を考察するには、前項で取り上げた母子絵のみならず春画を考察対象に組み入れる必要がある。大人の性行為の画面に登場する子どもの存在に着目した考察は、日

本では早川聞多『春画のなかの子供たち：江戸庶民の性意識』、(2000)、白倉敬彦『春画で読む江戸の性愛：老人子どもの視線から』(2006) があり、前者は子どもが夫婦円満の表象と読者に笑いを提供する役割をもつこと、後者は近現代の日本西洋で大人の性行為の場面から排除された子どもの役割を細かく分類して考察している。また早川の編著による学術的資料集も刊行されている（『日文研所蔵近世艶本資料集成』2002～)。中国における研究考察は筆者は未見であるが、性行為をめぐる伝統的な研究考察が少なくないだけに、今後の資料発掘により大きな進展が期待できる。また日中比較は、さらに儒教文化圏、グローバルな比較考察を促す契機となる。性的視点とともに、母子、父子、親子、子どもの性別、婚姻習俗等、多岐にわたる多様な視点からの多面的な考察成果が望める。

おわりに

アリエスの登場以来、半世紀、子ども観の社会史研究は、今、西欧中心の研究史を越えたグローバルな研究に向かっている。アジア地域を対象とする研究は、国別研究を土台に、より広域的な地域研究への進展、グローバルな研究への連係、成果共有が求められている。アジア地域の子どもの観形成に大きな役割を果たした東アジア儒教文化圏の子ども観は、強い共通性とともにそれぞれが独自にもつ特徴による固有性も大きい。国別研究成果をアジア内部で共有し、さらに世界的な共有に展開することにより、欧米中心に進められてきた子ども観の社会史研究に、新たな発展をもたらすことが期待できる。そこにおいて注目されるのは、西欧の子ども観の社会史的研究で成果を生み、本稿でも用いた絵画資料による考察である。文字だけでは明確にできない対象間の共通点、類似点（普遍性)、相違点（多様性、固有性）を視覚的に示す利点をもつ絵画資料は、異相性が煩雑に入り組み、多様性に富む東アジアの考察に対しても有用性が高い。子どもを描いた絵画といえば、嬰戯図に注目が集まりやすいが、本稿で述べてきたように、一般的な風俗画は子どもの社会基盤、人間関係を含めた時代と社会の特徴を映す重要な考察領域である。今後、中国も含めて資料を発掘し、多面的、多角的な考察による研究進展を図る必要がある。子ども観の社会史研究は、子どもと社会の相互関係により子どもを通して時代と社会と読み、時代と社会を通して子どもを発見する。グロバールな研究への展開は、子ども、時代、社会、階層、性別、そして人間そのものの新たな発見を生み出すものとなる。本稿を手がかりにさらに考察を進めていくことにしたい。

主要参考文献（本文中に記載した文献、図像資料の提供源、一部注釈中に記載した文献は割愛している）

〔中国語文献〕

① 畏冬『中国古代儿童題材绘画』1989 北京 紫禁城出版社

② 海外藏历代名画选编辑委员会编『海外藏历代名画选』（全8巻）1998 长沙 湖南美术出版社

③ 金維諾総主编『中国美術全集』（全51巻）邢振齡主编 年画 2010 合肥 黄山书社

④ 國立故宮博物院編輯委員會編『嬰戲圖』1990 台北 國立故宮博物院

⑤ 國立故宮博物院編輯委員會編『故宮書畫圖錄』（全31巻）1989 台北 國立故宮博物院

⑥ 蒋英炬, 杨爱国著『汉代画像石与画像砖』20世纪中国文物考古发现与研究丛书 2001 北京 文

物出版社
⑦ 焦秉貞『百子团圆图』2005 2006 杭州 浙江古籍出版社
⑧ 绥德汉画象石展览馆编 李貴龍・王建勤主编『绥德汉代画像石』陝西古代美術經典 2001 西安 陝西人民美術出版社
⑨ 陝西省博物馆・陝西省文物管理委員会合编『陕北东汉画像石刻选集』1959 北京 文物出版社
⑩ 天津市艺术博物馆编『杨柳青年画』1984 北京 文物出版社
⑪ 中国青少年研究中心主编『百年中国儿童』2000 広東 新世纪出版社
⑫ 中国古代書画鑑定組編『中国繪畫全集』（全30巻）中国美術分類全集 1997 北京 文物出版社・浙江美術出版社
⑬ 中国农业博物馆编 夏亨廉・林正同主编『汉代农业画像石』1966 北京 中国农业出版社
⑭ 法国巴黎大学北京汉学研究所编 傅惜华主编『汉代画像全集』（中仏語）初編・二编 1950 1951 上海商务院书馆、2014 北京 学苑出版社影印
⑮ 薄松年『中国娃娃：喜庆欢乐的婴戏图』2009 上海 上海辞书出版社
⑯ 孟元老原著・張臨生導讀・張擇端繪圖・冼懿穎主編『繁華之城：東京夢華録』経典20 2011 台北 大塊文化出版
⑰ 李飞编『吉祥百子』2007 杭州 西冷印社
⑱ 李林・康蘭英・趙力光编著『陕北漢代畫像石』陝西文物精华丛书 1995 西安 陝西人民出版社
⑲ 趙雅書「關於耕織圖之初步探討」『幼獅月刊』1976 第43巻 第5期：15-21

〔日本語文献〕
① 石井美樹子『聖母のルネサンス：マリアはどう描かれたのか』2004 東京 岩波書店
② 江戸子ども文化研究会編『浮世絵のなかの子どもたち』1993 東京 くもん出版
③ 河野通明「常民研本「四季耕作子供遊戯図巻」の成立」神奈川大学日本常民文化研究所編『歴史と民族』15号 1999 東京 平凡社：7-53
④ 北山修編『共視論：母子像の心理学』2005 東京 講談社
⑤ くもん文化研究所編『浮世絵に見る江戸の子どもたち』2000 東京 小学館
⑥ くもん子ども浮世絵ミュージアム：https://www.kumon-ukiyoe.jp
⑦ 黒田日出男『〔絵巻〕子どもの登場中世社会の子ども像』1989 東京 河出書房新社
⑧ 鍬形蕙斎（北尾政美）原画『近世職人尽絵詞』山東京伝ほか3名詞書、絵巻（摸本）東京国立博物館蔵：https://www.dl.ndl.go.jp/api/iiif/1287215/manifest.json、『江戸職人づくし』1980 東京 岩崎美術社
⑨ 国書刊行会編『目でみる江戸時代:江戸風俗画集成』ⅠⅡ（全2巻）1985 東京 国書刊行会
⑩ 小林忠監修『母子絵百景：蘇る江戸の子育て』公文浮世絵コレクション 2007 河出書房新社
⑪ 斎藤研一『子どもの中世史』初版2003 復刊2012 東京 吉川弘文館
⑫ 沢山美果子『江戸の乳と子ども：いのちをつなぐ』2017 東京 吉川弘文館
⑬ 柴田純『日本幼児史:子どもへのまなざし』2008 東京 吉川弘文館
⑭ 白倉敬彦『春画で読む江戸の性愛：老人子どもの視線から』2006 東京 洋泉社
⑮ 千葉市美術館『江戸へようこそ 浮世絵に描かれた子どもたち』展覧会図録 2014 千葉
⑯ 中村俊春編『絵画と私的世界の表象：変容する親密圏／公共圏』2012 京都 京都大学出版会、『Images of familial intimacy in Eastern and Western art（The intimate and the public in Asian and global perspectives）』2014 Leiden Brill
⑰ 早川聞多『春画のなかの子供たち：江戸庶民の性意識』2000 東京 河出書房新社

⑱ 早川聞多編著;栗山茂久 P・フィスター訳『日文研所蔵近世艶本資料集成』日文研叢書 2002 ～ 京都 国際日本文化研究センター
⑲ 東アジア美術研究室編『海外所在中国絵画目録改訂増補版（ヨーロッパ編)』1992 東京 東京大学東洋文化研究所付属東洋学文研センター刊行委員会
――――『海外所在中国絵画目録改訂増補版（アメリカ・カナダ編)』（上・下）
――――『海外所在中国絵画目録改訂増補版（東アジア編)』
⑳ 馬淵明子「作られた母性：19世紀末の母子画についての考察」鈴木杜幾子・千野香織・馬淵明子編著『美術とジェンダー :非対称の視線』1997 2003 東京 ブリュッケ：287-313
㉑ 村地稔三・佐藤哲也・鈴木明日見・伊藤敬佑圭編『子ども観のグローバルヒストリ―』2018 東京 新曜社
㉒ 冷泉為人・河野通明・岩崎武彦『瑞穂の国・日本：四季耕作図の世界』1996 淡交社 京都
㉓ 渡部武「清代の焦乗貞画『御製耕織図』とその系譜」『町田市立博物館蔵 たはらかさね耕作絵巻 康熙帝御製耕織図』町田市立博物館図録第118集 2000 東京：91-93

〔欧文文献と訳書〕
① Anita Schorsch『Images of Childhood :An Illustrated Social History』1979 Main Street Pr、北本正章訳『絵でよむ子どもの社会史：ヨーロッパとアメリカ・中世から近代へ』1992 東京 新曜社
② Elika Langmuir『Imagning Childhood』2006 Yale University London、高橋裕子訳『「子供」の図章学』2008 東京 東洋書林
③ Fass, Paula S. ed『Encyclopedia of Children and Childhood in History and Society』2003 Macmillian Refernce、北本正章監訳『世界子ども学大辞典』2016 東京 原書房
④ Hugh Cunningham『Children and Childhood in Western Society Since 1500』1995 2005 Addison-Wesley Longman Ltd Routledge、北本正章訳『概説 子ども観の社会史：ヨーロッパとアメリカからみた教育・福祉・国家』2013 東京 新曜社
⑤ Maria Tsaneva『John George Brown: 120 Masterpieces』2014 Kindel 版 Amazon Services International Inc.
⑥ Philippe Ariès『L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime』1960 Paris Plon、杉山光信・美恵子訳『〈子供〉の誕生：アンシァンレジウム期の子どもと家族生活』1980 東京 みすず書房

〔図像出所一覧〕ローマ数字は図番号を示し、番号順に配列。

・該当画像をコレクションとしてWEB公開している機関には＊、その他は出典文献として「主要参考文献」の○付き番号に言語の頭文字付けて表示

〔中国〕
・西安碑林博物館：1　主要参考文献中⑬　　4　主要参考文献中⑧⑨⑱
・四川博物院：2　主要参考文献中⑥⑬
　本稿で使用した拓本は（広島県立美術館）収蔵の「酒肆画像转酒肆Ⅰ」による。
・〔台湾〕国立故宮博物院：6 10 11 13 14 18 19 22 23 24 25
　主要参考文献中②③④⑤⑫（22、23は⑤にのみ収録）

25は、画像の鮮明な国立博物館デジタルアーカイブ（『御製耕織圖』（清）焦秉貞［造］；（日本）櫻井絢摹）1808の画像を使用した。

・〔北京〕故宮博物院：15 16 17 20 21 30　主要参考文献中⑫⑯

・国家図書館（善本特蔵部特蔵）：28　主要参考文献中⑦⑰

・天津楊柳青画社・天津楊柳青木版年画博物館：26 27 39 40 41 主要参考文献中③⑩⑰

〔日本〕

・大阪市立美術館：8　主要参考文献中②

＊・泉屋博古館〔京都〕：9

＊・くもん子ども浮世絵ミュージアム（https://www.kumon-ukiyoe.jp）：29 31 32 33 34 37 42 43 44 46 47

＊・東京農工大学付属科学博物館蚕織錦絵アーカイブ（https://archives_tuat-museum.org）：45

〔欧米〕

・〔仏〕元パリ大学北京漢学研究所原蔵（Université de Paris. Centre d'étueds sinologies）：3
現在の原石所蔵不明。拓本は主要参考文献中⑭（二編）にのみ収録。

＊・〔米〕ボストン美術館（Museum of Fine Arts Boston）：5 38

＊・〔米〕クリーブランド美術館（Cleveland Museum of Art）：7
周文矩『宮中図巻』全四段はクーリブランド美術館、メトロポリタン美術館、ハーバード大学フォッグ美術館に分割収蔵、本稿で取り上げた「開歩」はクーリブランド美術館収蔵。

＊・〔米〕メトロポリタン美術館（The Metropolitan Museum of Art）：12 48

＊・〔英〕スコットランド国立美術館（National Gallery of Scotland）：35

＊・〔英〕アイルランド国立美術館（National Gallery of Ireland）：36